

『クリスマス・キャロル』の構造と聖書

松 本 淳 子

Abstract

A Christmas Carol published on 19 December, 1843 remains the most famous and universally beloved of all of Charles Dickens's works. It is the heart-warming moral story of Ebenezer Scrooge, an elderly mean-spirited and cold-blooded miser who undergoes a dramatic transformation into a better, kinder and gentler man as a result of his encounters with the ghost of his former business partner, Jacob Marley and the three spirits of Christmas Past, Present, and Yet to Come. The storyline of this timeless classic looks simple and easy-to-understand for everyone, and suitable for reading to children at the fireplace, making it the ideal Christmas entertainment.

However, taking a closer look at the details of the novel, we can find every section filled with Bible messages and carefully built upon biblical principles. In this study, I will examine how the ghosts play the roles of Christ and Death to lead us to the resurrection of the soul and all ghost sections are integrated into a Christian central teaching "Repent to be saved and do good works to have everlasting life," making it a successful Christian allegory.

はじめに

Charles Dickens (1812-1870) (以下ディケンズとする) の数ある作品の中でも、『クリスマス・キャロル』(*A Christmas Carol*) (1843) ほど有名で、これほどまで世界中の人々から長く愛されてきた作品は他にないのではないだろうか。プロットも極めてシンプルで理解しやすく、子供向きの童話として炉端で子供に読み聞かせるのにちょうどよい短さで、クリスマス物語

(The Christmas Books) と呼ばれる一連の作品群の最初の小説として、1843年クリスマスに向けて出版された。利己心と旅を通しての人間成長をテーマにした *Martin Chuzzlewit* (1844) の執筆中に書かれただけあって、その構想を引き継ぎ、強欲爺である主人公エベネーザ・スクルージ (Ebenezer Scrooge) は夢の中を3人の幽霊と共に旅をしながら変貌を遂げていく。

当時のイギリスは、植民地支配や産業革命による急速な発展によって、大英帝国として未曾有の繁栄と栄華を誇っていた。その光の影には、そこから生み出される公害や貧困、非人道的な過酷な労働などの多くの社会問題が横たわっていた。当時のそうした拝金主義という価値観の象徴である金の亡者スクルージが、3人の幽霊に連れられ様々な不思議な体験をすることによって改心し、人の心を取り戻し自他共に幸せを見つけ始めるこの物語は、当時の人々の心を大きく揺り動かし爆発的なヒットとなった。当時の増刷や海外出版、公開朗読会などだけでなく、今日まで幾度となく映画化、舞台化、ドラマ化、アニメ化されており、世界中で最も広く親しまれてきたディケンズの代表的作品の一つである。ディケンズの名を世界に知らしめることとなった *A Christmas Carol* を Angus Wilson は、“the success of the venture, the great wave of personal, direct emotion that came to him from readers” をもたらした、ディケンズの “a compendium of social obsessions” と評し、この作品にも彼の社会批判のまなざしを読み取っている (181)。

ディケンズが生涯憎んでやまなかった貧困、犯罪、不平等、経済偏重などの当時の社会の病弊に対する社会批判が、児童文学と言っているほどのかつてない柔らかな筆使いで描かれており、ヒューマニズムあふれるアレゴリー小説となっている。このどれもが理解しやすい構造を有する『クリスマス・キャロル』であるが、小説の細部を見ていくと、各所がキリストの存在にあふれ、聖書の言葉に基づいた構成となっており、それらが見事にキリスト教教義に統合されていることに気づかされる。ディケンズは、聖書を “it

teaches you the best lessons by which any human creature who tries to be truthful and faithful to duty can possibly be guided”なものであり、人々を義務に対し忠実であるよう導いてくれる“the best book that ever was or will be known in the world” (Paroissien 167) であると位置づけているが、『クリスマス・キャロル』は、その人々の魂のガイドブックである聖書の様々な教えを伝えるものとして構成されている。

この作品は三部構成になっており、それぞれに登場する幽霊や各内容は、聖書の様々な言葉やキリストの姿が色濃く反映されたものになっている。本論では、三人の幽霊に付された救世主キリストと魂の永遠の死という役割と、この作品構造の基盤に、聖書において最も大切な教え「赦しと悔い改めによる善行によって人は永遠の命を得ることができる」というキリスト教精神の根幹を成す教義がどのように反映されているかを考察していきたい。

I

第一の幽霊 (The First Spirit) と第二の幽霊 (The Second Spirit) は疑似キリストとして描かれており、それぞれ違った役割を与えられている。まず第一の幽霊の役割を見ていこう。ロンドンで共同経営の事務所を営んでいる主人公スクルージは、悪名高い守銭奴であり冷酷な心の持ち主で、金銭欲に支配され、長い付き合いのある唯一の商売仲間であったジェイコブ・マーレイ (Jacob Marley) が亡くなった時でさえ、悲しむ様子は一切なく、葬式さえをも商才をふるうチャンスに変え、マーレイのまぶたの上に置かれた冥銭さえ奪い去ってしまうほど、血も涙もない冷徹な人間であった。「彼の心の冷たさ」(9) は周りの空気さえも凍りつかせるほどで、書記や甥っ子、人々からのクリスマスの祝辞に憤慨し、寄附の依頼を一蹴し、一切の交際や施しを拒む孤独な老人であった。そうしたスクルージの前に、クリスマスの夜、「過去」「現在」「未来」をスクルージに見せる3人の幽霊が現れる。第

一の幽霊は「過去のクリスマスの幽霊」(the Ghost of Christmas Past)と名乗って登場する。この幽霊は、疑似キリストとして描かれており、聖書でたびたび語られるキリストの言葉「最も尊いものは純粹無垢な子供の心」であるということや、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ18:3)という聖書の言葉を人々に思い起こさせ、そうした純粹な心を取り戻させる役割を果たしている。

第一の幽霊の姿はキリストを彷彿とさせるものとなっている。幽霊は、部屋中を光で照らすほど全身から光を放ち、純白の長い上着を着、腰には光る帯を締め、頭のとっぺんから煌々たる光が射す“supernatural medium”

(55)であった。また、幽霊が手にするヒイラギは、常緑でキリストの永遠の命を表すだけでなく、その棘はキリストが処刑される際に頭につけられていたいばらの冠を、その赤い実はキリストが処刑された時に流した血を模しているとされ、キリストの受難を象徴するものであることから、キリストを強くイメージさせる役割を果たしている。この幽霊は、スクルージの子供時代を見せて回る。彼が純真であった子供時代は、なにものよりも大きく彼の心を変えていく。子供時代の純粹な記憶が、氷のようなスクルージの心を溶かし、実際に、石のような心の持ち主のスクルージに、第二、第三の幽霊の場面では見せることのない涙を幾度となく流させているのである。昔懐かしい広い野原一面に楽しい音楽が満ちわたり、子供たちが大はしゃぎする姿を見た時スクルージは感涙に目を潤ませ、人々が口々にクリスマスおめでとうと言い合うのを聞いた時喜びで満たされてすすり泣く。貧しい家で独りさみしく本を読む子供時代の自分を見た時には胸に迫るものがあり、とめどもなく泣き、懐かしいアリ・ババ爺さん (old honest Ali Baba) や子供たちを見て大興奮し泣き笑う。また、昔の恋人ベル (Belle) が守銭奴と化したスクルージと決別し別の男性と結婚して築いた家庭をスクルージは目にして目を潤ませる。

この子供時代の章はいったいなにを意味しているのだろう。それは、

William Wordsworth (1770-1850) が “We are Seven” において reason で物を考える大人には見えないものが見える子供の純粹さを、“Rainbow” において感動する子供の心を失わない大人であることの歎びを歌って子供の純粹さを賛美しているように、ここにおいても、子供の純真さこそ魂の理想であり天国への鍵とするキリスト教的思想が謳われている。この章の役割は、純真無垢な子供こそが最も尊い存在であり、キリストそのものであり、この子供のようになれる人だけが天の国に入ることができるとする聖書の教えに人々を立ち返らせることである。無垢な子供はキリストであり最も偉大な存在として受け入れられなければならないことが、聖書において、たびたび言及されている。

He took a little child and set him in the midst of them. He said to them, “Whoever receives one of those little children in My name receives Me; and whoever receives Me, receives not Me but Him who sent Me.” (Mark 9.36)

Let the little children come to Me, and do not forbid them; for of such is the Kingdom of God. (Mark 10.15)

I say to you, whoever does not receive the Kingdom of God as a little child will by no means enter it. (Mark 10.15)

Unless you are converted and become as little child, you will by no means enter the Kingdom of Heaven. (Matthew 17.3)

Whoever humbles himself as this little child is the greatest in the Kingdom of Heaven. (Matthew 18.4)

7

Whoever receives one little child like this in My name receives Me. (Matthew 18.5)

「子供のような無垢な心こそ尊く必要とされなければならない」というこの聖書の教えは、ティム坊や (Tiny Tim) が無垢なまま天に召された時、作者に代わって物語を語る語り手が “Spirit of Tiny Tim, thy childish essence was from God!” (107) と称え、スクルージが聖書の “He took a child and set him in the midst of them” (Mark 9.6) という言葉を耳にしていることに端的に表れている。また、拝金主義で変貌してしまったスクルージに失望し去っていくかつての恋人ベルが “I have seen your nobler aspirations falls off one by one, until the master-passion, Gain, engrosses you.” (65) と指摘した際、スクルージが “I was a boy.” (66) と答えていることから、失われてしまったものが子供のまっすぐな心であったことがわかる。

利益追求に走り欲にとらわれた当時の人々に向けられた「心を入れ替え子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」というこの章のキリストの教えを体現するかのように、第一の幽霊は、疑似キリストのような容姿だけでなく、子供のような大人という奇妙な特徴を有して描かれている。筋骨たくましく老人のように髪は白いが、しわ一つないみずみずしい子供のような顔をしており、子供のような大人の姿をしている。子供と大人の奇妙なミックスチュア。これは、「子供は私である」と明言するキリストそのものであり、子供の心を失わぬ大人を象徴しているのではないだろうか。第一の幽霊の章において示唆されているものは、スクルージが失ってしまった、金銭より大切なものを知る子供時代の汚れなき無垢な心の大切さなのである。

II

第一の幽霊で逃げ出したいほど動揺し憔悴したスクルージのところに、第二の幽霊が現れる。第二の幽霊は「現在のクリスマスの幽霊」(the Ghost of Christmas Present) と名乗り、彼もまた疑似キリストとして描かれて

おり、スクルージに世界の隅々で祝われているクリスマスを見せて回りながら、彼に人の心を取り戻させ“魂の復活”へと導く役割を果たしている。第二の幽霊がどのように疑似キリストとして描かれているか順に見ていこう。マント一枚を全身にゆるやかにまとい、たぷりとしたひだの下のはきは裸足で、優しそうな顔に輝く目をした幽霊は、「頭にヒイラギの花冠」をかぶっており（ヒイラギはキリストが処刑される際に頭に付けていたイばらの冠、キリストの受難、常緑樹であることから永遠の命を象徴している）、キリストの姿を彷彿とさせる。スクルージは幽霊の衣に触れることで、人々が陽気に互いに祝うクリスマスの朝の街頭に降り立つが、そこでこの幽霊の不思議な力を目の当たりにする。幽霊は手にした不思議な松明で、人々に和解をもたらして回り、この松明から出る“a peculiar flavour”を“to a poor one most” (77) にふりかけて回る。すべての貧しい者への同情から、スクルージの書記のボブ・クラチット (Bob Cratchit) の住居を祝福 (blessed) し (78)、遠くまで行き、病人や苦しむ人、貧しい人を癒し、救貧院や病院、牢屋、みじめな者の巢窟まですべてを祝福するその姿は、まるでイエス・キリストのようである。スクルージ自身も、第二の幽霊を神と認識しているかのように見える。“You would deprive them of their means of dining every seventh day” や “It has done in your name, or at least in that of your family” (78) というスクルージの言葉からも、スクルージは、7日目に休まねばならない不便は幽霊のせいであると考えており、それはすなわち幽霊を、人々に日曜日を安息日として休むよう定められた神だと認識しているということに他ならない。第二の幽霊と世界中を飛び回って見て回る移動の過程も、まるで神の視点のようである。幽霊は神のように空を飛び回り、壁を突き抜け、どこへでも自由に現れることができる。幸せそうなクリスマスの街角、ボブのクリスマスの温かな炉端から、荒涼とした暗い沼地の地の底で働く抗夫の家庭まで一っ飛びし、波荒れ狂う暗黒の海の上を飛び越え、灯台を守る男たちや船員、甥っ子フレッド (Fred) のクリスマスの

食卓、さらに遠くへ、その他多くの家庭のクリスマスの祝福と幸福を見て回るのである。これこそ、George Gissing (1857-1903) が、ディケンズが愛してやまないと指摘する “an idealization of the English home,” “the type of domestic beauty he finds beneath a humble roof,” “everyday life of poor and homely English folk” (58) の愛すべき例証なのである。

この疑似キリストである第二の幽霊との旅によりスクルージは涙こそ流さないものの、子供のようにはしゃぎ感動する人の心を取り戻していく。ロンドンのクリスマスの街角では胸の高鳴りを覚え、世界中にあったクリスマスの小さな幸せ、薄情な自分にも祝福を分け与えようとしてくれた温かなクラチット家やフレッド一家の光景に、忘れていた喜びや感動の感情が蘇る。楽しいフレッドの家庭で、スクルージの気持ちはますます和らいでいき、子供たちが戯れるゲームに我を忘れて夢中になり、もう少しいたいと幽霊に子供のように熱心に頼みこんだり、彼はまるで子供のような純粋な感受性を取り戻していく。忘れていた子供時代の純真さや喜びが、彼の心に再び感動という灯を灯し、長く目を閉ざしてきた人の幸せに彼を開眼させたのである。

この第一、第二の幽霊たち、つまり第一、第二の疑似キリストは、物語全体の構成において、どのような役割を果たしているのだろうか。それは、幼い日の純粋な心を忘れ、利己的な理由からさまざまな過ちを犯してしまう人間の愚かさを赦し、人類を気づきと悔い改め、救いへと導いていくキリストそのものの役割ではないだろうか。悔い改め (repentance) とキリストによる赦し (remission) は、原罪を内包する人間が神の国に至るために不可欠なキリスト教の中心的思想である。それは、キリストが発した第一声が “Repent, for the kingdom of heaven is at hand.” (Matthew 4.17) であることにも表されている。

Do you despise the riches of His goodness, forbearance, and

longsuffering, not knowing that the goodness of God leads you to repentance? (Romans 2.4)

I have not come to call the righteous, but sinners, to repentance. (Luke 5.32)

Repent, and let every one of you be baptized in the name of Jesus Christ for the remissions of sins; and you shall receive the gift of the Holy Spirit. (Acts 2.38)

Now commands all men everywhere to repent. (Acts 17.30)
Time is fulfilled, and the kingdom of God is at hand. Repent, and believe in the gospel. (Mark 1.15)

第一の幽霊が提示したものは、汚れを知らない子供時代である。第二の幽霊が提示したものは、石のように心を閉ざし背を向けてきた者に示す、人としての幸せである。それにより、スクルージは様々な気づきと後悔に至る。没落し荒れた家で孤独に本を読んでいた子供時代のスクルージは自分の身を守る術としてお金という新たな偶像に心を売り渡し、恋人ベルに “In a changed nature, in an altered spirit, another hope as its great end. In everything that made my love of any worth or value in your sight.” (67) と別れを告げられてしまうが、本来自分がそこにいたであろう彼女の幸せな家庭生活を目にした時、自分の失ってしまったものの大きさに目をうるませる。クラチット家で病弱なティム坊やが長生きできるのかどうかと今まで感じたことがない心配に心を痛み、“Oh no, kind Spirit! Say he will be spared.” (82) と幽霊に懇願し、そう長くは生きられないだろうという死の予告に大きなショックを受ける。そして “If they would rather die, they had better do it, and decrease the surplus population” (39) や、“Are there no prisons? and the Union

workhouse?” (38) といった、かつての自分が放った言葉の残酷さに言葉を失い、深くうなだれる。スクルージはこうした後悔だけでなく、フレッドの家庭の温もりの中で、“he softened more and more; and thought that if he could have listened to it often, years ago, he might have cultivated the kindness of life for his own happiness” (99) と、利他的な生き方に目覚めていく。ディケンズは、その著書 *The Life of Our Lord* (1934) の中で、自分の子供たちに向けて、“Never be proud or unkind, my dears, to any poor man, woman, or child.” (Dickens, *Life* 6) と訓えているが、聖書の有名な一節 “Whatever you want men to do to you, do also to them.” (Matthew 7.12)、“Love your neighbor as yourself” (Matthew 22.39) にもあるように、他者に寄り添う生き方、博愛、慈愛の精神は、神の無償の愛「アガペー」に根差した、キリスト教の根幹ともいうべき最も大切な思想である。

第二の幽霊は、人間は過ちを犯しうる存在であることを、スクルージに “There are some upon this earth of yours who lay claim to know us, and who do their deeds of passion, pride, ill-will, hatred, envy, bigotry, and selfishness.” (78) と説いている。この宿罪説は、人間は原罪に生まれ、罪を犯す存在であると見るキリスト教における人間観の前提である。

They are all under sin. (Romans 3.9)

There is none righteous, no, not one. (Romans 3.11)

For all have sinned and fall short of the glory of God, being justified freely by His grace through the redemption that is in Christ Jesus. (Romans 3.23-24)

人間をその罪から救済するためにつかわされたのがイエス・キリストである。

For God so loved the world that He gave His only begotten Son, that whoever believes in Him should not perish but have everlasting life. (John 3.15)

He poured out on us abundantly through Jesus Christ our savior, that having been justified by His grace we should become heirs according to the hope of eternal life. (Titus 3.6-7)

この二人の幽霊は、聖書の“repentance leads to life” (Acts 11.18) を成就すべく、そうした罪深い存在である人間を赦し、その過ちに気づかせ悔い改める機会を与え、神の道に立ち戻るチャンスをお与えくださるキリストのような役割を果たしているのではないだろうか。ではその神の道、つまり人が生きるべき道とはどのようなものなのか。

聖書では、過ちと罪を犯した人間は死んだ状態であり、善い行いをするからこそ生きることであるとされている。善い行いをするために人は造られ、善い行いをもって歩むのであり、たとえ過ちにより魂が死んだ状態で生きている人間も、キリストの赦しと教えによって復活し、善行に励めば神の国に入ることができるということが、『エファソの信徒への手紙』において、人の生きるべき道として記されている。

And you He made alive, who were dead in trespasses and sins. (Ephesians 2.1)

Even when we were dead in trespasses, made us alive together with Christ and raised us up together and made us sit together in the heavenly places in Christ Jesus. (2.5-6)

For we are His workmanship, created in Christ Jesus for good

works, which God prepared beforehand that we should walk with. (2.10)

マーレイの “The common welfare was my business; charity, mercy, forbearance, and benevolence were all my business.” (49) と語るこの言葉こそ、善き行いこそが人間の義務 “duty” (Romans 16.27) であるとする聖書の教えを伝えるものではないだろうか。

また、聖書の「あなた方は以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです」(『エフェソの信徒への手紙』第2章第1節) という言葉にもあるように、キリスト教においては、罪を犯した人間は、肉体的には生きていても魂は「死んだ」状態であることが、冷酷な拝金主義者として生きるスクルージの描写に見事に反映されている。欲に凝り固まり石のように冷たい心で孤独に生きていたスクルージの描写は、死のイメージに満ちている。自分の立てた物音だけがこだまする暗闇と静寂が支配する家に、彼は独りで住んでいる。その彼の住む部屋は死んだマーレイの元部屋であり、そこへと続く長く暗い大階段に突如と現れる霊きゅう車や棺の描写には、身の毛もよだつものがある。憐れみや慈悲が私のすべきことだったと語るマーレイの言葉は、私たち読者に聖書の有名な言葉を思い起こさせる。

Blessed are the merciful, For they shall obtain mercy.

Blessed are the pure in heart, For they shall see God.

Blessed are the peacemakers, For they shall be called sons of God. (Matthew 5.7-9)

過ちの多い人生を歩んできたスクルージの悔い改めが、人間の罪を一身に背負い、神に人間の赦しを請うて十字架で贖罪の死につく、慈悲と赦しの象徴であるキリストの生誕のクリスマスの日に起こることも、読者に改めて自身

の悔い改めに気づかせるものとなっている。甥フレッドは、クリスマスは、キリストの赦しの時節であると、次のように語っている。

There are many things from which I might have derived good, by which I have not profited. Christmas among the rest. But I am sure I have always thought of Christmas time as a good time: a kind, forgiving, charitable, pleasant time: the only time I know of. (36)

第一の幽霊の章は子供の純粋な心の大切さを、第二の幽霊の章は悔い改め、神の御心に沿った生き方を、という聖書の教えを私たちに伝えるものとなっている。

III

悔い改めと、善行によって救われる道をキリストに代わって示した第一、第二の幽霊であったが、悔い改めなかった人にはどのような未来が待っているのかを見せしめる役割を果たしているのが第三の幽霊、「未来のクリスマスの幽霊」(the Ghost of Christmas Yet To Come) である。やさしげで様々な物を見せながら改心へと導いていったキリストのような第一、第二の幽霊とは打って変わって、全身真っ黒で恐ろしげな容貌の第三の幽霊は、まさに死のイメージである。真っ黒な衣を頭からすっぽり覆り、暗闇と見分け難いほどの漆黒である。威厳に満ちた神秘的な存在を前にしてスクルージは厳粛な恐れに満たされる。黒い衣の奥にある自分を見据える気味の悪い鋭い目に恐怖ですくみあがり、これまでの幽霊の中で一番恐ろしいと感じる。そしてこの幽霊は一言も発することなく、ただ黙って、目を背けたいくなるような厳しい現実（となるであろう未来）を指し示すだけなのである。それは悔い改めるチャンスを永遠に失ってしまった人間に、悔い改めなかった結果を

粛々と見せる使命を帯びた“魂の死”を司る幽霊だからである。彼が担う役割は“the judgement of God” (Romans 2.2) であり、彼が示すものは、生きている間に悔い改めの善行を行わなかった人間が迎える、最後の審判のあとの運命である。聖書には、人はその行いによって、神によって等しく裁かれることが記されている。

But we know that the judgment of God is according to truth against those who practice such things. (Romans 2.2)

Do you think that you will escape the judgment of God? (Romans 2.3)

In the day when God will judge the secrets of men by Jesus Christ, according to my gospel. (Romans 2.16)

ではスクルージにもたらされる結果とはどのようなものだろう。スクルージは、人々が昨夜死んだ人の話をしているところに出くわす。参列する人もなく、人々は悲しむどころか、“Old Scratch has got his own at last” (97)、“a wicked old screw” (100)、“He was struck with Death... along by himself” (100) と喜びせせら笑っている。そして、かつてのマーレイのように、着ていたシャツや毛布もすべてをはぎとられ、カーテンもないむき出しの寝台に冷たく横たわる無残な死体が自分であることを知るのである。自分の悲惨な死を目の当たりにしたのち、あれほど助けてほしいと懇願したティム坊やが自分の強欲の犠牲となって亡くなったことも知らされる。第三の幽霊はこれらの厳しい結果を突き付けることで、スクルージに今生きているうちに改心すべきことを無言のうちに促している。

肉体の冷たい死だけでなく、善行を行うことがなかった魂が、マーレイと同じ悔恨に満ちた、決して天国にたどり着くことのないさまよえる魂の永遠

の旅につくことは明らかだ。悔い改めなかった者の死後の姿を象徴しているのが、スクルージの強欲の先達であったマーレイであるが、その描写はまさに永遠の罰と苦悩に満ちている。“the chain I forged in life” (47) とは、生きていた時に彼が犯した拝金主義の様々な罪の象徴であるが、その重い鎖に何重にも縛られた恐ろしい亡霊の姿となってマーレイは登場する。マーレイは、生きているうちになぜ神聖な星であるベツレヘムの星に導かれて気の毒な人や貧しい人に心を向けなかったのか、今はもうどうすることもできない、という果てしない後悔の念と、今は休息も安心もない永遠にさまよえる魂となっていることをスクルージに何度も訴えかけている。悔い改めなかった者の運命の象徴としてマーレイが説く「生きている間にキリスト教精神に基づいた有益なこと、公益、慈善、あわれみ、寛大、慈悲こそ自分のすべきことだった」(49) という言葉こそ、この作品が最も伝えなかったキリスト教の教えと言えるだろう。聖書の言葉、“eternal life to those who by patient continuance in doing good seek for glory, honor, and immortality.” (Romans 2.7) にもあるように、人は善行により栄光と誉れと不滅を得、永遠の命を与えられるのである。

善い行いをした者の魂は不滅であるという聖書の思想は、スクルージの冷たい死体を前に、「愛され尊敬され善い行いをしてきた者は、死しても死が滅ぼすことのできない不滅の魂を手に入れることができるのだ」と語る語り手の次の言葉に明確に表されている。

Oh, cold, cold, rigid, dreadful Death, set up thine alter here,
and dress it with such terrors as thou hast at thy command:
for this is thy dominion! But of the loved, revered, and
honoured head, thou canst not turn one hair to thy dread
purposes, or make one feature odious. It is not that the hand
is heavy and will fall down when released; it is not that the
heart and pulse are still; but that the hand was open,

generous, and true; the heart brave, warm, and tender; and the pulse a man's. Strike, Shadow, strike! And see his good deeds springing from wound, to sow the world with life immortal! (102)

生きているうちに改悛し、神の子としての道に再び生きることを促す「疑似キリスト」である過去と現在の幽霊と、罪の道を歩み続ければ永遠の死という結末の提示によって改心を促す最後の審判である「死」を体現する未来の幽霊は、見事にスクルージを改心に至らせる。スクルージは “Men's courses will foreshadow certain ends, to which, if persevered in, they must lead. But if the courses be departed from, the ends will change?” (108) と幽霊に問いかけ、“Hear me! I am not the man I was. I will not be the man I must have been but for this intercourse.” (108) とこれから変わることを強く訴え、“I will honour Christmas in my heart, and try to keep it all the year. I will live in the Past, the Present, and the Future.” (110) とキリストの教えに生きることを涙ながらに誓うのである。Edmund Wilson (1895-1972) が “the reform of Scrooge in *A Christmas Carol* shows the phenomenon of salvation in its purest form.” (1) と述べているように、最も純粋な salvation が成就したと言えるだろう。

IV

『クリスマス・キャロル』は、第一の幽霊で子供のような無垢な心を、第二の幽霊で悔い改めにより歩むべき道を、第三の幽霊で利己的生き方の先にあるさまよえる魂となる地獄の存在を知り改心に至った、悔い改め永遠の命を手につけるという聖書の教えに忠実に導かれた、魂の復活物語である。聖書の「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決し

て天の国に入ることはできない」(Matthew 18.3)という言葉のように、改心したスクルージは“merry as a school boy”(111)、“a baby”(112)のように無邪気にはしゃぎ、「罪のために死んでいた私たちをキリストと共に生かしキリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の玉座につかせて下さいました」(Ephesians 2.6)という言葉のように、キリスト(幽霊たち)の教えに従って生きることを選び、魂の復活を遂げる。神々しい空を見上げながら羽のように軽く、天使のように楽しく、人々にクリスマスの挨拶をし、施しをし、以前は追い払っていた募金の紳士にも厚志を与え、子供や乞食に語りかけ、甥フレッドのクリスマスの食卓に加わり、ボブの昇給や援助を申し出、幸福な人々とのつながりという“wonderful happiness”(115)を取り戻す。幸福と感謝と愛と満足に満ちた、幸福の象徴であるクラチット家の仲間に、生まれ変わったスクルージは加えられ、ティム坊やの“a second father”(116)となることが許される。それは、かつてスクルージを自分の息子のように処遇し、クリスマス・パーティにも招待してくれた心優しい自分の元雇い主フェジウィグ老人(Fezziwig)の姿そのものである。またそれは、娘に寄り添われ幸せそうなベルの夫の姿を見て、“such another creature, quite as graceful and as full of promise, might have called him father, and been a spring-time in the haggard winter of his life”(68)とかつて願った、父という立場でもあった。スクルージは、キリストと最後の審判の役割を果たす3人の幽霊によって、悔い改め、子供の心と、人々の温かな輪という大切なものを取り戻すことができたのである。

このスクルージの魂の復活劇を通して、ディケンズは、思いやりや親切な行きこそ、功利主義的な社会から人々を救うと訴え、当時の人々がスクルージに続いて、聖書の求める“to be ready for every good work”(Titus 3.1)となって、悔い改め、善行に生きる神の道に立ち返ることを祈念したのである。スクルージが“He became as good a friend, as good a

master, and as good a man, as the good old city knew, or any other good old city, town, or borough, in the good old world” (116) となったように、ディケンズは、人々も、善き友となり、善き主人となり、善き人間となって、神の御心に叶う善い世界を築いていってくれることを願ったのである。その願いは、“It was always said of him that he knew how to keep Christmas well. ...May that be truly said of us, and all of us!” (118) という語り手の言葉にも表されている。そしてスクルージの “God bless Us, Every one!” (118) という祈りの言葉で物語を締めくくっていることから、今後、みな一人一人が彼に続き、罪が赦され魂が救済され、永遠の命 (everlasting life) を得ることをディケンズは願ったのである。

For God so loved the world that He gave His only begotten Son, that whoever believes in Him should not perish but have everlasting life. (John 3.16)

『クリスマス・キャロル』は、各章が様々な聖書の教えに基づいて設計され、それらが最終的に「子供のような純真な心を大切に利他的善行に生きよ」というキリスト教の根幹を成す教義に向かって統合されていく、見事な構成を有する魂の復活劇となっている。人々が聖書に従って善行という義務に忠実に生き、より善い社会を築いていってくれることを切に願って創作された、キリスト教の黄金律の上に「ヒューマニズムとキリスト教の利他的精神の合体」を見事に作り上げた、キリスト教的アレゴリー小説と言えるだろう。

事実、ディケンズが願ったように、『クリスマス・キャロル』はヴィクトリア時代の人々に極めて大きな影響を与えた。ディケンズ自身も “with what a strange mastery it seized him for itself, how he wept over it, and laughed and wept again, and excited himself to an

extraordinary degree” (Forster 283)、“a little book I published on the 17th of December, and which has been a most prodigious success the greatest, I think, I have ever achieved” (Hogarth, Letters 1 : 57) と今までにない大成功だと捉えていた。Angus Wilson もその反響の大きさを “The impact of *A Christmas Carol* on readers was overwhelming.” (184) と述べ、William Makepeace Thackeray (1811-1863) は “It seems to me a national benefit, and to every man or woman who read it a personal kindness” (Collins 147) と国家的恩恵と評し、友人であり判事でもある Francis Jeffrey (1773-1850) は善に満ちたこの作品 (“genuine goodness”) と発行そのものが善行 (“you have done more good”) であり、なによりも積極的善行 (“more positive acts of beneficence”) を促すものだ と絶賛している (380)。『クリスマス・キャロル』旋風はさらに続き、『クリスマス・キャロル』を読んだのち、Thomas Carlyle (1795-1881) はクリスマス・ディナーを2回も催し、Robert Louis Stevenson (1850-1894) は貧しい者に施しをすることを誓い、アメリカの企業家はクリスマスに工場を閉め七面鳥を従業員に送り、ノルウェーの女王はイギリスの足の不自由な子供たちにプレゼントを送っている (Glancy 13)。

『クリスマス・キャロル』は、純粋な子供たちこそ神に近い存在であること、子供たちの清純無垢な心こそキリストが人々に求められているものであること、たとえスクルージと同じ罪と過ちを犯していたとしても、悔い改めと神の赦しによって善い行いに生きれば救われることを、スクルージの魂の軌跡を通して伝えているのである。

結び

『クリスマス・キャロル』は、キリストの存在や聖書の精神が作品の至る所に散りばめられた、「赦しと悔い改めによる善行によって人は永遠の命を

得ることができる」というキリスト教の教えに強く基づいた作品であった。冷酷なスクルージを改心へと導いた精霊たちは、それぞれキリスト教の理念に基づいた導き手としての意味が付与されていた。

第一、第二の精霊は、その容姿や振る舞いによってキリストを彷彿とさせる、擬似キリストとしてその役割を担っていた。第一の精霊は、スクルージに自身の純粋な子供時代を見せ、彼の氷のように固く閉ざされた心を溶かした。聖書において子供は、純粋で最も尊い存在とされているが、その最も神に近い存在とされる子供時代を目の当たりにすることによって、彼は人の心を取り戻し始めるのである。

第二の精霊も、ヒイラギの冠などキリストのような容姿だけではなく、人々を祝福し癒しを与えながら、神のように天空を舞って彼に世界中のクリスマスの情景や人の温かさに触れさせ、スクルージに人の心や感動の喜びを取り戻させていった。純真な心、悔い改めと人としての善き生き方へと教え導いた精霊たちは、罪を犯した人間を赦し、悔い改めさせ、更生へと導くキリストそのものの役割を担っていたと言えるだろう。

一方、改心へ優しく導いた赦しと慈愛のキリストとは真逆の方法で彼を改心へと向かわせたのが、死をイメージさせる第三の幽霊であった。彼が示すものは、改心せずに冷酷な心のままに突き進めばスクルージが迎えるであろう残酷な死であった。周囲の人々から見放され、侮辱と嘲笑を浴びせられ丸裸にされて横たわる死体となり、肉体を離れた魂は、マーレイと同じ無限の苦しみを味わうことになることにも気づかされる。罪を犯し続けた人間の運命を示した第三の幽霊は、まるでキリスト教における最後の審判の役割を果たしており、彼に更生への最後のチャンスを与え、改心へと導いているのである。

このように3人の幽霊たちはキリスト教の教えと精神を反映させながら、スクルージに神の御心に沿った人の生き方を取り戻させていった。善行を一切せず拝金主義という罪を犯していた当初のスクルージは、肉体は生きてい

でも、その魂は死んだ状態であったが、幽霊たちに導かれながら改心に至り善行に目覚めたことで、彼の死んでいた魂は復活を遂げたのである。『クリスマス・キャロル』は、スクルージの魂の復活劇を通して、“Unless you are convinced and become as little children, you will by no means enter the kingdom of heaven” (Matthew 18.3) にある「子供の純粋な心の大切さ」と、“For we are His workmanship, created in Christ Jesus for good works” (Ephesians 2.10) にある「善行に生きる」という聖書の中心的教えを読者の心に強く喚起させるものとなっており、まさに、救世主キリストの降誕を祝う聖夜を舞台にした、聖書の言葉と精神が星空のように見事にちりばめられたキリスト教的アレゴリー小説と言えるだろう。

クリスマス・キャロルとは、キリストの誕生を称える讃美歌であるが、この題名が選ばれた理由は二つあるだろう。一つは、フレッドの言葉にあるように、お互いに心を開きクリスマスの祝いの言葉を掛け合いながら、親切ない気持ちになって人を赦し、情け深くなる共感の時節であるということである。

Christmas among the rest. But I am sure I have always thought of Christmas time ...as a good time: a kind, forgiving, charitable, pleasant time. (36)

もう一つは、子供の頃の感受性を取り戻し善行に目覚めたスクルージの魂の復活の物語にとって、赦しと復活の象徴であるキリストの降誕祭であるクリスマスの季節が最もふさわしいと考えられたからであろう。また、スクルージは、「時には子供に返るのはよいことであるし、それにはその偉大な創始者(キリスト)が子供であるところのクリスマスが一番よい季節である」(“It is good to be children sometimes, never better than at Christmas, when its mighty Founder was a child himself.” (89) と述べ、子供に返るに最もふさわしい時節と述べている。

心からクリスマスを尊び、過去、現在、未来の教えの中に生きると誓ったスクルージが、物語の最後において、クリスマスの祝い方を最も知る人とされ、「私たちについても同じことが言われますように、私たちのすべての者がそうなりますように」と祈っていることから、私たちが彼に続くことが求められて結ばれているのである。G. K. Chesterton (1874-1936) が “Whether the Christmas visions would or would not convert Scrooge, they convert us.” (76) と、Edgar Johnson (1901-1995) が “Scrooge’s conversion is more than the transformation of a single human being. It is a plea for society itself to undergo a change of heart.” (487) と述べているように、次に続くべきは私たちなのであろう。巻末最後のスクルージのクリスマスの祝辞が、ティム坊やと同じであることから、彼らは心から願ってくれている。私たちが彼らと共に、神の御心に叶う神の子たらんことを。

“God bless Us, Every one!”

引用・参考文献

- Adrian, Arthur. *Dickens and the Parent-Child Relationship*. Ohio: Ohio University Press, 984.
- Chesterton, G. K. *Charles Dickens*. London: Methuen and Co., 1906.
- Collins, Philip, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul Limited, 1971.
- Dickens, Charles. *A Christmas Carol* (1843). London: Penguin Books, 2003.
- , *The Life of Our Lord: Written for His Children During the Years 1846 to 1849*. New York: Simon and Schuster, 1999.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens. vol.1*. London: Everyman’s Library 781, 1967.
- Gissing, George. *Charles Dickens: A Critical Study*. U.S.A: Kessinger Publishing, 2008.
- Glancy, Ruth F. *Dickens’s Christmas Books, Christmas Stories, and Other Short Fiction*. Michigan: Garland, 1985.

- Hogarth, Georgina and Mary Dickens ed. *Letters of Charles Dickens*, vol.4. Cambridge: Cambridge University Press, 2011.
- , *Letters of Charles Dickens*, vol.1. Cambridge: University Press, 2011.
- Jeffrey, Lord Francis. *Life of Lord Jeffrey; With a Selection from His Correspondence*, vol.5. New York: Franklin Classics, 2018.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol.1. Boston: Little Brown & Company, 1952.
- Paroissien, David. *Selected Letters of Charles Dickens*. Basingstoke: Macmillan Press, 1985.
- Schlicke, Paul ed. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Middlesex: Penguin Books, 1972.
- Wilson, Edmund. "Dickens: the Two Scrooges," *The New Republic*, March 4, 1940.
- 日本国際ゲデオン協会 『New Testament 新約聖書 NKJ / 新共同訳』、1999.